絆（きずな）

平成２６年１２月
第４７号
荒川区立南千住第二中学校
校長　齊 藤　　進

地域学習のすすめ
～ 南千住は魅力満載！ ～

校長　齊藤　進

南千住は史跡文化財が多く点在する地域で、その歴史は奈良時代にさかのぼります。南千住は杉田玄白が**「解体新書」**を著した舞台であり、吉田松陰、橋本左内などが埋葬された寺や、松尾芭蕉が**「おくのほそ道」**に出立した千住大橋があります。近代では、大規模工場が多く集まり、めざましく工業が発展した地域でもあります。プロ野球の**東京スタジアム**もかつてこの地にあり、伝統工芸を受け継ぐ職人が多い地域でもあります。

南千住は歴史小説や時代小説にもよく登場します。小塚原縄手、首切り地蔵、千住宿、千住大橋、日光道中、隅田川、大川、橋場の渡しなどは**池波正太郎**氏や**佐伯泰英**氏、**吉村昭**氏の作品には数多く登場します。今、読んでいる佐伯泰英著「「鎌倉河岸捕物控」では、南千住検定でも出題された、千住大橋架橋の際に伊達政宗が資材を調達したことや伊奈備前守忠次(いなびぜんのかみただつぐ)が工事を差配したことが描かれています。

このように、全国に誇る南千住の知的財産とも言える歴史を中学生が学ぶことは、とても意義ある教育活動であると考えます。本校が行っている地域学習の成果を生かす地域主催の行事が行われ、本校生徒が活躍する場面がありました。奥の細道千住あらかわサミット開始記念として行われた**「芭蕉の大橋渡り」**では、本校生徒１２名が芭蕉などに扮して千住大橋の清掃活動に参加しました。ふるさと文化館の**野尻館長**の説明で、さらに芭蕉の足跡がよくわかりました。また、青少年育成南千住地区委員会主催の**「わくわくまちあるきたんけん隊」**では、本校生徒１９名が小学生のガイド役となって史跡巡りを行いました。この様子が地区委員会発行の広報誌「青少年」で紹介されています。

あるエピソードを紹介します。南千住西部連合町会会長、南千住六丁目本町会会長の**内山富雄**さんは「あるいて学ぼう南千住検定」で紹介されている、歯の神様で知られる**日枝神社**をよくお参りしたそうです。そのかいあって、今でも歯は丈夫で悪いところが一つもないそうです。**南千住は魅力満載**です。

さて、二学期は学校行事などが盛りあがり、思い出に残る充実した学期でした。３年生は進路を決める大切な時期です。面接練習で緊張することも、歯をくいしばって勉強することも、人生の中で大切なことです。がんばってください。

今年も残りわずかとなりました。生徒のみなさん、保護者・地域の皆様、どうかよいお年をお迎えください。

後期生徒総会

議事を進める議長団

１１月２６日(金)、**後期生徒総会**が行われました。この生徒総会は、９月に改選された生徒会本部役員による初めての総会となります。しかし現在、南千住二中のアリーナ(体育館)は天井工事のため使用できません。そのため、本来、全校が一堂に会して行うべき生徒総会を縮小した形式で実施せざるを得ませんでした。そこで、各クラスでの討議を経て、生徒会本部役員、各専門委員長に加え、学級委員など各クラスの代表３名が出席して多目的室で行いました。

クラス代表が質問に立つ

答弁する専門委員長

このように形式はいつもと異なりましたが、生徒会本部からは活動目標やスローガン、専門委員長からも活動方針などが示され、それに対し、クラスで話し合われた内容に基づいた代表者質問が行われました。質問に加え、賛成意見や修正案、反対意見など、活発な討議が行われた後、生徒会本部、各専門委員会の活動方針が全会一致で承認されました。その内容は、各クラスの学級活動の時間に代表者から報告されました。

第２７期生徒会活動スローガン

「深めよう　仲間との絆　地域との絆」

社明パレード

１２月７日(日)、毎年恒例の**「社会を明るくする運動南千住地区パレード」**が行われました。この**“社明パレード”**は荒川区や南千住地区委員会が明るい社会の構築をしようと呼びかけて行われるもので、毎年、南千住二中の生徒も参加しています。レスキュー部、吹奏楽部をはじめ、有志ボランティアとして陸上競技部、サッカー部、ソフトテニス部男子、バレーボール部など、総勢７０名余りが参加しました。

パレードの出発点となる南千住二中の校庭では、先日完成した大亀と昨年度の大緋鯉の御輿が登場しました。御輿は有志によって担がれ、御輿の先導を務める３年３組男子生徒に導かれ天王太鼓の演奏に合わせて校庭を練り歩き、参加者も大いに沸き、開会式に花を添えました。

パレードではレスキュー部員がプラカードや横断幕を携え、吹奏楽部も寒くて手が凍えるなかでもさわやかに演奏し、南千住二中から荒川一中までのコースを歩きました。南千住二中生がここでも活躍していました。

有志により担がれ校庭を練り歩く御輿

芭蕉の大橋渡り

１１月３０日(日)、南千住二中生がおくのほそ道に関わるイベント「芭蕉の大橋渡り」に参加しました。このイベントは松尾芭蕉がおくのほそ道の旅に千住大橋を渡って出立したことにちなんで行われるもので、荒川区が主催し、今年度はじめて開催されました。そこで、地域学習を進める南千住二中にもいち早く声がかかり、参加を募ったところ１２名の１,２年生が参加しました。

「松尾芭蕉」になりきって

楽しく美化活動

イベントの内容は、当時を彷彿とさせる衣装に身を包み、素盞雄神社に集合し、千住大橋を渡りながら地域の美化活動をしました。南千住二中生は、先日行われた霜月祭(本校文化祭)の地域学習劇で使用した衣装や、本格的な着付けをしていただいた衣装などを身にまとい、先頭を切って活動しました。西川荒川区長さんや地域の方々もその姿に目を細めていらっしゃいました。美化活動が終わり、素盞雄神社に戻ると、参加者全員で「芭蕉むすび」をいただきました。地域の歴史をたどり、地域をきれいにする活動の後のおむすびの味は格別でした。

この模様は、TBS テレビ「噂の東京マガジン」(H27.1.4　13:00～)、荒川ケーブル TV「こんにちは荒川区」weeklynews（H.26.12.25 ～ 12.31)、東京新聞で紹介されます。

〔芭蕉の大橋渡り参加者〕

２年１組女子１名、２年２組女子１名、
２年３組女子２名、１年１組女子１名、
１年２組男子２名、１年３組女子５名

2年生

性教育講演会

１２月５日(金)３,４校時、２年生を対象に性教育講演会が行われました。この講演会には、昨年度に引き続き、帝京科学大学医療科学部看護学科医学博士の **齋藤　益子**先生をはじめ、同大学の医師・学生の方々もご来校下さり、生命の誕生や性感染症などのことについてお話しいただきました。全体会後は６つの分科会に分かれ、沐浴人形(もくよくにんぎょう；本物の赤ちゃんにとても近い大きさ･重さの人形)をだっこしたり、妊婦ジャケット(妊婦さんのおなかの大きさや重さと同じくらいのジャケット)の装着などを体験しました。

妊婦ジャケットをトを装着

これらの体験を通し、妊婦さんの大変さや赤ちゃんの扱いもほんの少し分かったように思えました。また、生命誕生の尊さや性に対する正しい知識と理解を得ることができました。

沐浴人形で体験

三瑞小合同あいさつ運動

１２月１日(月)の朝から１週間、南千住二中の生徒会とお隣の第三瑞光小学校児童会との**「合同あいさつ運動」**が行われました。三瑞小の校門近くで、登校する小中学生にはもちろん、出勤・通学等で街行く方々にも元気な朝のあいさつをしました。さわやかなあいさつを返してくださる方がほとんどで、通りは活気にあふれました。今年で３年目を迎え、すっかり恒例になりました。南千住二中からは生徒会本部役員ばかりでなく、１,２年生を中心に延べ７０人を越える有志の生徒や先生方も数多く参加しました。朝の元気なあいさつは気持ちよく、とてもよい取り組みでした。

また、同じ時間帯には、**環境委員会**により、この時期校舎周りに多くなる落ち葉の清掃作業も行われ、毎日大きなゴミ袋いっぱいの落ち葉が集められています。

部活動等　生徒の活躍

荒川区薬物乱用防止ポスター･標語

ポスター部門　**佳　作**　２年１組女子
標　語　部　門　**地区会長賞**　１年２組女子　　**佳　作**　２年３組女子

あらかわ小論文コンテスト

教育委員会賞　３年１組女子
佳　作　２年１組女子、２年２組女子、１年２組女子、１年３組女子

南千住マイスターのコーナー

南千住と歴史上の人物　その8
『井上省三』と　千住製絨所

荒川工業高校西側と大手スーパーマーケット脇に、古い**「赤レンガ塀」**が残っており、区の史跡として保存されています。この赤レンガ塀は明治時代から昭和初期に操業していた**「千住製絨所」**外回りの塀です。明治維新から約10年。日本の殖産興業、そして国内初の羊毛工業発祥の製絨所跡なのです。この製絨所の初代所長が**「井上省三」**です。

井上省三は、弘化2年(1845)長州・萩藩出身で、若い頃、山口兵学校で蘭学を学びます。明治になると、**木戸孝允**(剣豪として名高い**桂小五郎**と同一人物)に従い上京し、ドイツ語を習得します。その後、兵学を学ぶ目的でドイツに留学しますが、外国の進んだ技術を目の当たりにし、日本を豊かにしたいと殖産興業を志し、ドイツ・ベルリン郊外にあるザガンの毛織物工場に一職工として働きます。省三は4年間かけて毛織物技術を修得し帰国します。その頃、内務大臣**・大久保利通**は、それまで高価な輸入に頼っていた毛織物の生地を国産化し、軍隊の制服も木綿からウールに切り替えたいと考えていました。そのために隅田川沿いのこの地が選ばれました。省三は帰国後、大久保の要請で内務省に出仕し、千住製絨所開業とともに初代所長に就任しました。

この日本で最初の毛織物工場の開業、技術導入、運営などを一手にこなし、それまで輸入に頼っていた羊毛製品、洋服の国産化を実現した省三は、**「日本毛織物工業の父」**と称されています。

千住製絨所は蒸気機関を用いた日本最初の毛織物(ウール)工場で、その技術は一般に公開されました。それがもとで、民間の毛織物会社、板紙会社、ガス会社などが次々に開業し、南千住から日本の近代工業が発展していくのです。

明治16年(1883)12月29日、製絨所の工場から出火、操業が出来なくなってしまいました。省三は復興のために奔走し、工場をたて直します。しかしその心労からか、明治19(1886)年、静養中の熱海で肺結核のため逝去しました。42歳という若さでした。

その後、製絨所は昭和20年まで操業し、終戦後は大和毛織がその操業を受け継ぎ、昭和35年までつづきます。

省三の偉業を讃え、荒川スポーツセンター脇に、井上省三君碑と胸像、そして日本羊毛工業発祥の地の碑が建てられています。

荒川区スポーツセンター脇
井上省三の胸像